

Gazette du bon ton : arts, modes & frivolités

(ガゼット・デュ・ボン・トン)

Paris : Librairie centrale des beaux-arts , 1912—1925

Hiler p.356 Colas 1202

今世紀最大のモード誌を挙げるとすれば、ためらうことなく私たちは本誌を推すであろう。ところで、このモード誌が高い評価を得ている理由はどこにあるのだろうか。それは疑いもなく本誌の豊かな芸術性そのものにある。

「稀にみるグラフィックな精妙さをもって刊行された(ヴェロネージ Giulia Veronesi)」この雑誌は、フランスのジャーナリスト、リュシアン・ヴォージェル (Lucien Vogel) によって創刊された。彼の父はもともと高名なデシナトゥールで、当時有名な風刺雑誌に構想豊かな作品を発表していた。父のこの独創的才能を受け継いだリュシアン・ヴォージェルが、本誌の編集に着手したのはまだ26歳の時であった。当時彼はすでに「アール・エ・デコラシオン (Art et décoration)」誌の編集責任、及びもう一誌のディレクターを務めていた。このように彼はその全生涯をモードの高揚のための高級誌に捧げたのだった。ちなみに、「ガゼット・デュ・ボン・トン」誌廃刊後の彼は第二次世界大戦後まで「ル・ジャルダン・デ・モード」(Le jardin des modes) 誌の編集を続けている。

20世紀に入ってからモード誌のファッションプレートは次第に網目写真版に置き換わりつつあって、かつての銅版手彩色の気品さとは比較にならぬ貧弱さに陥っていた。ヴォージェルを発奮させたのもこの点にあった。当時のパリのオートクチュールではポワレ (Poiret) のような新しいデザイナーたちの躍動が始まっており、『ポール・イリーブの語るポール・ポワレの衣装』とか『ジョルジュ・ルパープのみたポール・ポワレの作品』といったユニークな衣装アルバムが刊行されていた。これらは「流行衣装の制作行為を印刷美術の制作行為と結びつけることによって趣味の統一のために貢献し(ヴェロネージ)」、独自の様式を樹立することができたという点では一つの偉大な行為であった。ヴォージェルはこうして多分、いても立ってもいられなくなったのであろう。これにはバクスト (Léon Bakst)、バルビエ (Georges Barbier)、マルタン (Charles Martin)、イリーブ (Paul Iribe)、ドゥ・モンヴェル (Bernard Boutet de Monvel) の5人のほか、多くの若い画家や挿絵画家が参画した。このなかにはデュフィ (Raoul Dufy)、ルパープ (Georges Lepape)、ドリアン (Etienne Drian)、マルティ (André Marty)、ベニート (Eduardo de Benit) などがいる。

本館所蔵によると本誌は全12巻、69分冊からなっており、その構成は次のとおりである。

1年目 1912年11月から1913年10月までの12分冊 (第1/2巻各6分冊)。

2年目 1913年12月から1915年8/9月の合併号までの8分冊。(以後1915年10月から1919年までの約4年間は第一次世界大戦のため休刊)。

3年目 1920年1/2月の合併号から同年12月までの10分冊。

4年目 1921年1月から同年12月までの10分冊。

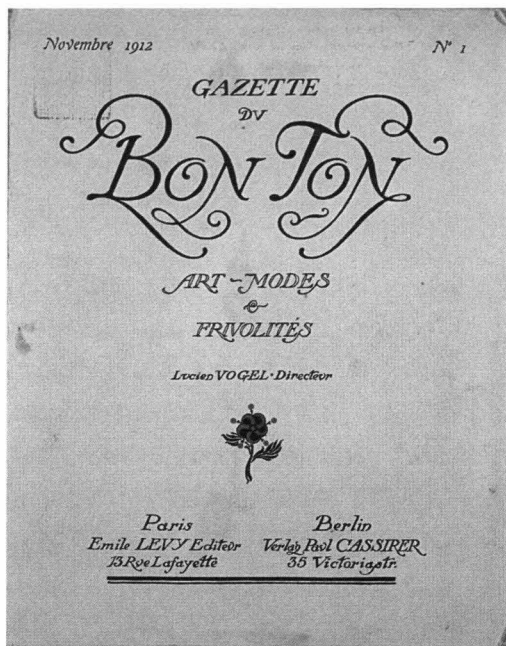
5年目 1922年2月から同年12月までの10分冊。

6年目 1923年6月から1924年6月までの10分冊。

7年目 1924年7月から1925年12月までの9分冊（本館では欠号であるが『Colas』による）。

なお本館には『第一次世界大戦後のボン・トン、1920年から22年までの抜粋』全2巻、Le bon ton d'après-guerre, extraites des années 1920 à 1922 de la gazette du bon tonという一種の事後抜粋集が刊行され、代表的200枚のプレートが収められていることも付記しておく。（石山 彰）

〔文化女子大学図書館蔵 西洋服飾ブックコレクション〕より修正して転載



創刊号（1912年11月号）表紙



1920年5月号 美しい髪飾りの婦人
シャルル・マルタン原画